

そこには案山子が立っていた。

やってきたのではなく、最初からそこにあるかのように。

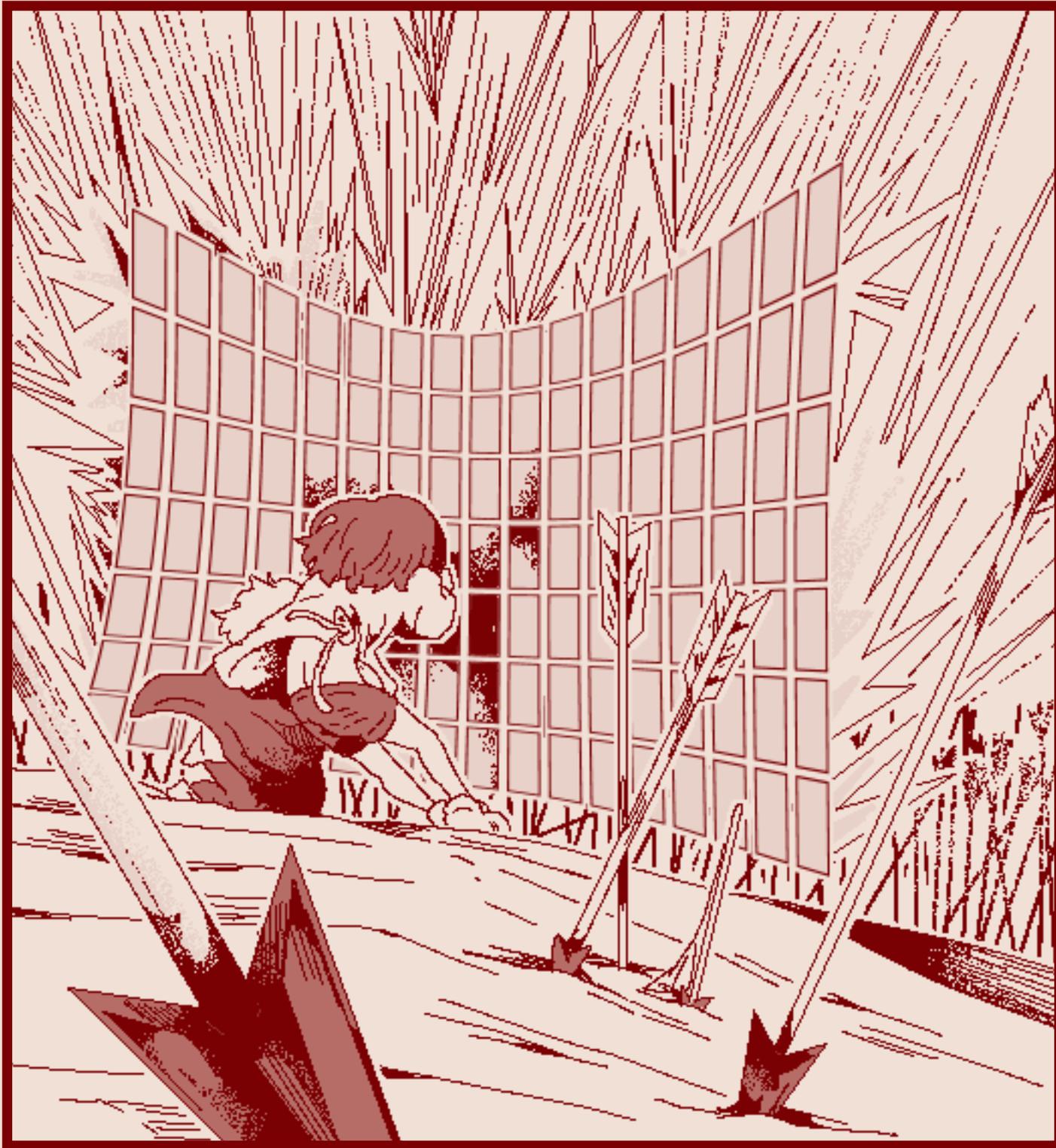
(予感としては、危険って感じやけど、先はあの狐面から助けてくれたよな…?)

「な…なあ、あん…!!」

案山子は当然のように弓を構え始める。



(なに、期待してんやウチは!この感じで味方な筈ないやろ!)
案山子には顔はなく、顔に浮かぶ黒い点とそれに付随して顔が蠢いていた。
そこに表情は一切なかったが、友好的な感情は感じ取れなかった。
(くる…!!!!)



「すまん!月彦!ちょい我慢してな!!クダモン!!死んでんとか悪いけど力貸してな!!!」

「分かってる…!やってやんよ!!!…あっ駄目全全力出ない…。」

「って、オイ!!!」

姿を出したクダモンはへのへのと小都華の肩に乗る。

ノヘモンがゆっくりと弓を引く。

(言うても弓、一発の後に隙が生まれる筈や、そんな時に頼むでクダモン!)

(分かった、でも余力は一発分位しか残ってないから!)

「分かって…る…!?」

「!?」

その瞬間、一発ではなく雨の様に矢が降り注いできた。

「うお…!なんやこれ!!????」

小都華は神札をなんとか展開できたが、隙どころか一步も前に進めない状況となった。

神札も攻撃により剥がされていくのを新しいものを展開し、なんとか防いでいるが、いずれ突破されるのは時間の問題となった。

「な…なんや!?ざっけ、ここに来て!?こんな!?」



「小…都華さん…トンネルに…」

「お…おう！」

小都華は月彦とトンネルの奥へ逃げて行く。

「小都華どうするの!?このまま行っちゃって、また戻っちゃう！」

「わーっとる!分かっとるけど!!どうするんや!あんなもん！」

(そもそもあの坊さんが言う事がホンマならあの案山子は幽霊やろ…なんで村の連中なくてウチらなんや。

あかん、トンネルに蓋をした神札も、もう持たん…死ぬんか…ここで。)

「小…都華さん、クダモンさん…落ち着いて…ゲホ…ゲホ!!」

「月彦、君無理すんな、喉焼けてるんやろ。」

「だい…じょうぶです…それより、落ち着いて、相手は…デジモンです。」

「デジモン言うても…あんなん…」

「相手は幽霊や妖怪じゃありません。」

あくまで有機と電子の両方の性質を持つ、あくまで生き物です。

矢の本数や狙いは人間の僕達とは…比べ物になりませんし…正確ですけど、その狙い、見立てでは視覚でした。」

「視か…そういう事か！」

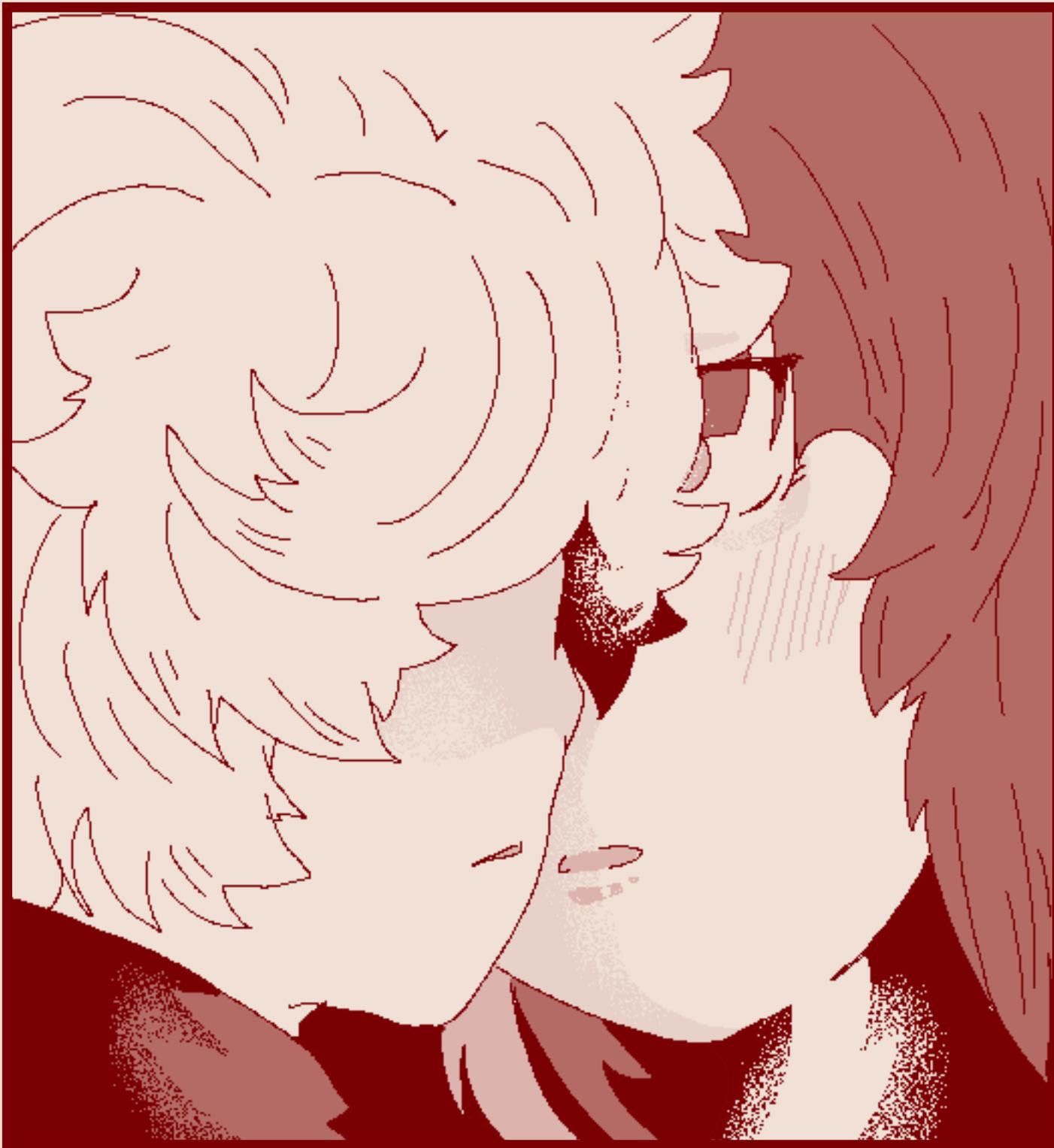
小都華はトンネル中の電灯を破壊していった。

幸運なのは、トンネルのループ箇所は出口付近であった事であった。

トンネルは暗闇に包まれた。



神札が破壊され、ノヘモンが中へ入って来る。
更に幸運だったのは、ガラス片を踏むことでノヘモンの位置が把握できた。
(狙うなら…クダモンさん…、相手が僕らを通り過ぎて奥へ行った時です。
ループが案山子にも有効なら逃げ場を防げますし、後方を取れるアドバンテージ
はどっちみちあります。)
(わか…!!!??)
鼠だろうか、小都華達は別の方向からの物音にノヘモンは正確に矢を射て断末魔
の鳴き声とその後の静寂が再び広がった。
(う…嘘やろ…こいつ、目だけやないんか?)
(…小都華さん…?)
動揺から小都華の呼吸が荒くなってきた。
それはノヘモンが近くに来る程に荒くなってきた。
恐怖心なのは震えて伝わって来た。
ノヘモンもその荒い呼吸に敏感に反応し、確実性はないまでも先に比べ歩む足取
りが遅くなって来た。
(はあ…はあはあ。)
(小都華さん…!)
(小都華!!)
(はあはあはあっ)
月彦の意図を小都華が受け取れていなかった。
恐怖心からかなのか、周りが見えていない。
ノヘモンが目の前で止まった。
小都華の呼吸がどんどん荒くなり人間でも耳を澄ませれば聞こえる程になってきていた。
クダモンが腹を括り戦闘の体勢を取った。



(クソっ…すみません!)

(…へああああああああ!????つつ月彦はん!!??小都華!!??)

(!!!???)

月彦は最小限の動きで小都華の呼吸と動きを止めるために、自身の唇を重ね、震えている腕を押さえた。

(んん!!!んん!!…!!…!…んっ。)

最初は静かに暴れていた小都華の動きも徐々に落ち着いていった。

音が止み、勘違いと思ったのかノヘモンは歩を進めて行き、遂に小都華達が後ろを取った。



「今や!!!クダモン進化!!!!」

「セーバードラモン!!!」

メテオウィング!!!」

クダモンが闇色の炎を纏った火の鳥に進化する。

ノヘモンが弓を構える前に、流星のように炎を飛ばすが、ノヘモンは一瞬早く躲した。

ノヘモンの表情はない筈だが、笑っているように見えた。

弓を引こうとした瞬間、後方から避けた筈の炎にぶつかり体勢を崩した。

「今や!セーバードラモン!!!」

「ブラックセーバー!!!!」

セーバードラモンの鋭い爪がノヘモンの顔面を勢いよく貫き吹き飛ばす。

吹き飛んだノヘモンは、それでも立ち上がろうとしたが、力尽きそのまま倒れ込んだ。

「はぁ…はぁ…堪忍して、成仏してくれや。」

セーバードラモンも力尽きクダモンに退化し倒れ込んだ。

「ようやくくれたな、ありがとな。」

「へへ…。」

クダモンに微笑んだ後、小都華は顔を真っ赤にして月彦を睨みつけた。

月彦の顔は反対に見る見る青くなっていった。

「…っイイー!!!イイー!!!月彦!!!お前な!!!おま…お前な!!!!傷直ったら覚え時!!!!」

イイー!!!!」

「ふぁい…。」

そ…それよりまだ、話聞けるかもしれませんよ。」

「ふん!!!!」